

教員養成課程専門科目における高校生の参画

—佐賀大学高大連携プロジェクト「教師へのとびら」の取組を手がかりとして—

竜田 徹*, 林 裕子*, 米田 重和*

Collaborative learning between high school and university students in undergraduate classes of a teacher training programme: Towards a smooth transition to higher education through the 'Pathways to being a teacher' project at Saga University

Toru TATTA, Yuko HAYASHI, Shigekazu KOMEDA

要 旨

本稿では、2014年度に始動した佐賀大学高大連携プロジェクト「教師へのとびら」における取組内容を報告し、その成果を基に、専門性・継続性・地域性を兼ね備えた学びの連携及び進学支援のあり方について論考する。本稿で焦点を当てる本プロジェクト第3回の取組では、「大学生と一緒に講義を受けよう」というテーマの下、本学学校教育課程の後期開講科目の中から英語科教育、数学科教育、国語科教育の科目を開講し、教科教育学の専門的内容について高校生と大学生が共に理解を深めることを目的とした。主に、「授業に対する視点の変換」、「教科観・進学意欲の高揚」、「学びの可視化」の3つの観点から、本取組の意義と課題についての洞察を深める。

【キーワード】 高大連携、教科教育、教員養成

1. はじめに

本研究は、佐賀大学高大連携プロジェクト「教師へのとびら」にて行った2014年度の取組を取り上げて、教員養成課程の専門教育科目に現役高校生が参画することの意義を、教科教育学研究の視点から明らかにすることを目的とする。

佐賀大学では、高大連携活動の一環として、教師を目指す高校生を育成する継続的プログラム——「教師へのとびら」を開催しており、2014年度はその初年次にあたる。本年度は3回にわたって佐賀県内の高等学校に通う、「教師」や「教育」を志す高校生を大学に呼んで、各回特色のある取組を行ってきた。本研究はこのうちの第3回「大学生と一緒に講義を受けよう」の実際を検討し、その成果を考察することにより、教員養成課程専門科目における高校生の参画あるいは大学生と高校生の連携が寄与することを、教

* 佐賀大学 文化教育学部 教科教育講座

科教育学の見地から明らかにするものである。

2. 佐賀大学高大連携プロジェクト「教師へのとびら」の概要

2. 1. 概要

「教師へのとびら」は、佐賀大学高大連携活動の一環として始められた新しいプロジェクト（主催：佐賀大学文化教育学部・アドミッションセンター、共催：佐賀県教育委員会）で、将来教職を志望する高校生を対象として、高校3年間と大学4年間を合わせた計7年間で「未来の教師」を育成しようとするものである。本プロジェクトは佐賀大学だけでなく佐賀県教育委員会の協力も得て実施されている。年に2～3回、高校3年間に計8回程度のプログラムを継続的に実施することにより、大学進学前に「教師」や「教育」について考える機会を提供する。参加する高校生に提示した「教師へのとびら」の目標は次の4点である。

- 「教師」という職業に対する理解を深める ○教師になるための「学び」について理解する
- 自分が本当に教師になりたいのかを問い直す ○自己分析を通して、目指すべき教師像を設定する

これらの目標を達成するため、参加する高校生は毎回のプログラムにおいて、自分の目標の立案→メインプログラムの受講→個人での振り返り→小集団での情報共有を行い、その過程をポートフォリオとして蓄積している。プログラムに継続的に参加し学習成果物を作成することが、本プログラムの大きな特色である。

高大連携活動は、本学においても、また全国の教員養成系学部をもつ大学においても、大学教員が高校生向けに授業を行ういわゆる模擬講義や、大学と高校の交流イベントなど、これまでさまざまなかたちで行われてきた。しかし、その活動が単発的であることや、連携の目的が一般的である（学問領域等別に特化されていない）ことが課題とされてきた。「教師へのとびら」は、こうした従来の高大連携活動の課題を克服した、目的的で継続的な、また地域と連携したプロジェクトとなっている。また、ミッションの再定義・教員養成機能の強化といった教員養成系学部への今日的要請とも方向性を同じくするものだといえる。

2. 2. 2014年度の展開

2014年度に開講したプログラムの概要は次の通りである。参加者数は高校の学校行事や課外活動等の関係でばらつきがあるが、佐賀県内各地から毎回50～100名が参加している。

〈第1回〉「講演 先生という職業を考えているあなたへ」2014年8月1日（金）

佐賀県教育庁学校教育課から講師をお招きし、教師になるきっかけ、教師の仕事の魅力や大変さ、教員志望の高校生へのアドバイスなどを、具体的な経験談を交えてお話いただいた。参加した高校生はメモを取ったり質問したりしながら、「先生という職業」について考えをもつことができた。

〈第2回〉「オープンキャンパスで新発見」2014年8月8日（金）

佐賀大学文化教育学部オープンキャンパスとして開かれた各教科の模擬講義に参加（各自が希望する一教科に参加）したのち、参加者相互で体験内容を共有する時間を設けた。参加した高校生は高校の学びとのちがいや各教科の専門的内容について理解を深めることができた。

〈第3回〉「大学生と一緒に講義を受けよう」2014年10月25日（土）

佐賀大学文化教育学部学校教育課程（以下、「本課程」）の後期開講科目の講義を本プロジェクトに合わせて開講し、履修者の大学生と参加者の高校生が一緒に講義に取り組んだ。高校生に教科教育学の専門的内容に触れてもらい、大学で教育を学ぶとはどのようなことなのか、考えを深めてもらうことを目標とした。

2. 3. プログラム第3回の内容

本研究で考察の対象とする第3回のメインプログラムは、上述のように、「大学生と一緒に講義を受けよう」と題して、15回続く各科目の1回分に高校生を迎えるかたちで実施したものである。当日の日程および開講した3科目の内容を次に記す。

【表1】「教師へのとびら」第3回主な日程

時間	内容
12:30～13:00	オリエンテーション、希望の科目に分かれて各教室に移動
13:00～14:20	講義（下記①②③を、同時進行で開講） ①英語科教育法Ⅱ「ICTを利活用した英語授業の実践について」（大学3年生対象） ②数学科教育法Ⅲ「数学の教材研究と授業づくり」（大学3年生対象） ③小学書写「硬筆を使用する書写の指導」（大学1年生対象）
14:30～15:00	報告会・振り返り

高校生は、オリエンテーションで各科目についての簡単な説明を聞いたうえで各自希望する科目の一つを選び、80分間の講義に参加した（講義時間は通常90分間であるが、今回は高校生に配慮して時間をやや短縮することとした）。そして講義終了後は、第1回や第2回プログラムと同様、高校生各自による振り返りと高校生どうしによる情報共有が行われた。

本研究で取り上げるのは、【表1】に記した3科目の講義の実際である。以下でまず研究の方法を述べ、次に、これら各科目の講義の実際と成果を論じていくこととする。

3. 研究の方法

3. 1. 講義計画の留意点

本研究では、1で述べた研究の目的と、2で述べた「教師へのとびら」の特色に基づき、次の3点に留意して講義を立案し展開することとした。

(1) 講義の内容——大学生対象の水準を維持

当該科目のシラバスに準拠し、当該科目の履修者である大学生対象の内容水準を維持する。高校生のみ対象のいわゆる模擬授業とはせず、あくまで教員養成課程の専門科目の一環として実施する。

(2) 講義の方法——大学生と高校生の対話と交流

大学生と高校生が対話し交流する機会を設ける。互いに関わり合う時間を設けることで、大学生と高校生の協働が豊かな学びの成果を生み出すことを期待する。

(3) 講義の評価——書くことによる振り返り

受講者全員に講義の感想を書いてもらう。これにより受講者各自に学びの成果の省察を促すとともに、本研究の検証資料の一つとしても活用する。

以上(1)～(3)に拠り、教科教育学の専門性と、大学生・高校生両者の学びの質が確保されるよう配慮した。上記の研究計画は後期開講前の2014年9月に講義担当者で共有するとともに、履修者の大学生にも必要な事前説明を行った。また参加者の高校生にも、オリエンテーションにおいて必要な説明を行った。

3. 2. 検証の方法

英語科教育、数学科教育、国語科教育の各視点から、それぞれの講義において、高校生の参画によってどのような成果が得られたかを、受講者の学習記録や作品・発表、講義担当者の授業記録や観察をもとにして検討したのち、総合考察を行う。

なお、本研究では、研究の総括を竜田が担当し、各講義の実践と考察を林（英語科教育）、米田（数学科教育）、竜田（国語科教育）がそれぞれ担当した。研究の目的・研究の方法の立案と総合考察は林、米田、竜田が共同で行った。

4. 実践Ⅰ——英語科教育

4. 1. 講義題目と概要

「ICTと英語教育」という題目の下、演習形式の授業を展開した。当日は、高校生18名（1年生12名、2年生5名、3年生1名）、大学生20名（3年生17名、4年生1名、大学院1年生2名）の計38名が受講した。

本学学校教育課程の自由選択科目の1つである本授業科目は、中学校（1種）教員（英語）免許状取得のための必修科目、及び、高等学校（1種）教員（英語）免許状取得のための選択科目に該当する。主に大学3年生を対象とする本科目は以下の2つを目標に掲げている。

- ① 小学校外国語活動及び中学校・高等学校外国語科の目的と目標や指導実践の諸問題についての理解・考察を深め、建設的な議論を行うことができる。
- ② 単元の指導計画作成・実践を通して指導技術高めると同時に、言語テストの作成・評価を含む演習を通して、外国語研究の基礎知識を身につけることができる。

【表2】「英語科教育法Ⅱ」15回の流れ

回	内容
1	外国語教育の目標について
2	指導案の作成
3	ICTと英語教育
4	ICTと英語教育：演習
5	ティーム・ティーチング
6	ティーム・ティーチング：演習
7	語彙指導
8	語彙指導：演習
9	文法指導
10	文法指導：模擬授業（導入）
11	文法指導：模擬授業（展開）
12	小中高接続のための英語教育
13	小中高接続のための英語教育：演習
14	言語テストと評価
15	言語テストと評価：演習

本時は本科目4回目の授業に当たる。同題目では2週目の授業であり【表2】、前時では、英語教育工学の歴史・動向について学び、小・中・高の外国語（英語）科の授業におけるICT（Information and Communication Technology）の利活用例やその効果に関する先行研究を概観・批評した。本時では、ICTを利活用した1時間分の英語授業を考案し、そのうちの15分を模擬授業で実践するという課題を設定し、大学生と高校生の協同学習を中心とする演習形式の授業を進めた。

4. 2. 本時の指導計画

- (1) 本時の学習内容の確認を行う。（5分）

本授業科目の概要と本時の位置づけを簡潔に説明する。特に、本時は本科目のシラバスの内容から

独立して用意された「特別な」授業ではなく、あくまで通常の大学の講義の1時間として実施する旨を伝える。大学生に前時の課題を返却しフィードバックを提供する。

(2) 前時の振り返りを行う。(10分)

本時の課題に向け、前時の学習内容(英語教育学の歴史・動向、ICTを利活用した授業実践例の概観など)についてPPT資料を用いて振り返りを行う。

(3) 小学校外国語活動組と中学校英語科組に分かれ、互いに自己紹介を行う。(10分)

受講者の希望をもとに、全体を小学生対象の授業作成と中学生対象の授業作成の2つの組に分け、各組で4～5名から成る大学生・高校生混合グループを作成する。各グループ内で、高校生と大学生は互いに簡単な自己紹介を行う。

(4) ICTを利活用した英語授業を考案する。(30分)

小学生グループは *Hi, friends! 1, 2* (小学校「外国語活動」教材)、中学生グループは検定教科書(*NEW HORIZON*, *SUNSHINE* など) から1単元選び、その中でICTを利活用した1時間分の授業を考案する。参考資料として、小学生グループには、佐賀県(溝口, 2014)と他県(田上, 2014; 奏, 2014)の指導案及び取組の実践報告資料を、中学生グループには、*NEW HORIZON* と *SUNSHINE* の言語活動例のリスト(佐賀県教育センター中学校英語科教育研究委員会, 2008-2009)を参考資料として配付する。大学生は指導案(略案)を作成する。

(5) 模擬授業を実践する。(15分)

各グループで、大学生が高校生相手に模擬授業を実践する。高校生は対象児童または生徒になりきって授業を受ける。授業後に、高校生は、模擬授業の評価(A-C)を行う。

(6) 本時のまとめ・振り返りを行う。(10分)

全体で模擬授業の実施内容や課題点を共有する。授業感想シートに記入させ、提出させる。

4. 3. 講義の実際

4. 3. 1. 本時の意図と本時までの流れ

1960年代に「教育工学」が新出し、個別学習録音や視聴覚映像教材学習などの機能を果たすLL(Language Laboratory)教室が設置されるようになった。1970年代には「英語教育工学」という分野が発足し、現在に至るまで、情報科学技術の発展に伴い、IT機器や設備のダウンサイジング(小型化、軽量化、小規模化)が著しく進んでいる(金子, 2014)。従来のLL教室は、今日ではCAI機能(出席・成績管理)、サーバ機能(マルチメディア教材の作成・集積・配信)、ネットワーク機能(学内LAN、インターネット利用)などのCALL(Computer-Assisted Language Learning)教室へと進化を遂げている。それに伴い、パソコンやスマートフォンで行えるCALL教材やe-learning教材が開発され、語彙学習、スピーキング練習、発音強化、検定試験対策(英検、TOEICなど)など、その種類は多様性に富む(林, 2014)。英語科教育においても、タブレット端末の導入、デジタル教科書、PPT教材の開発・実践など、近年ICTを利活用した教育が全国的に展開されており、授業実践報告や実証研究報告の数が大幅に増加している。佐賀県では、県立の中学校、高校、特別支援学校にタブレット端末などを導入し、市町でのICT環境整備も積極的に進めるなど、全県規模で「先進的ICT利活用教育推進事業」が進められている(佐賀県教育委員会, 2014)。その取組内容と成果は全国的に注目を集めており、文部科学省(2014)が実施した「平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査」では、①学校におけるICT整備環境「教育用コンピュータ1台あたりの児童生徒数(4.3人/台)」と、②教員のICT活用指導力の状況(全下位項目(大項目A-E)¹⁾において、全国トップであることが示されている。本科目受講者は佐賀県の小学校・中学校・高等

学校の教員志望の学生が過半数を占めることや、全国的に教育の情報化が進んでいる動向を踏まえ、ICT機器を活用する授業実践演習を通し、学生に十分なコンピュータリテラシーを兼備した指導力を修得させることは、教員養成課程の喫緊の課題であると言える（金子，2002）。

そこで本時では、前時の学習で深めた、英語科教育における ICT 政策の変遷や授業実践上の諸問題に関する理解と考察をもとに、実際に授業を考案し実践するという演習形式の授業を展開した。そのような取組により、英語科教育における ICT 機器の役割や利活用のあり方についての理解の深長と実践的な指導スキルの向上を図ることを目標とした。

本科目の受講者は、本時までに、学習指導要領に見る英語教育政策を概観し、外国語教育の目標と意義について学習を行っている。更に、単元計画や本時の指導計画の手順など、学習指導案の作成について、講義と演習を通して知識を深めることができています。受講者は全員平成26年度前期までに専門必修科目である「英語科教育法Ⅰ」を履修しているため、英語科教育の目標・内容、及び言語習得の諸理論や指導実践の諸問題についての基礎的な知識を身に付けている。

4. 3. 2. 協同学習の実際

本時では「小学校外国語活動、もしくは、中学校英語教育における ICT を利活用した言語活動やプロジェクトを考案し、模擬授業で実践する（大学生は指導案の略案を作成する）」ことを演習課題と設定し、高校生と大学生が1つの授業を考案する協同学習を実践した。演習の冒頭で大学生を外国語活動組と中学校英語科組に分けた後、高校生を希望の組に移動させた。その後、各組内で4～5名から成る高校生・大学生混合グループの編成を行った結果、外国語活動グループは2つの混合グループに、中学校英語科グループは4つの混合グループに分かれ、演習課題に取り組んだ。演習課題では、大学生が主導し、英語の授業中に使ってみたい ICT 機器やその活用方法について高校生に意見を求め、それを基に大学生が授業計画を完成させていくという活動形態が見られた。各グループが考案した言語活動例は【表3】に示す。本活動は約30分に亘り進められ、その後、各グループの大学生は同グループの高校生を相手に約15分間の模擬授業を展開し、高校生は児童・生徒役と授業評価者の役割を担った【写真1】。授業後の高校生の感想の一部を【表4】に紹介する。

【写真1】模擬授業の様子



【表3】高校生・大学生混合グループが考案した言語活動例

グループ	単元	言語活動例
小学生1	<i>Hi, friends! I 'I like apples.'</i>	○先生の好きなもの嫌いなもの当てゲーム ・電子黒板を活用し、イラストと I like~, I don't like~ を線で結ぶ。
小学生2	<i>Hi, friends! I 'How many~?'</i>	○パフェ作りゲームをする。 ・果物を選んで理想のパフェを考える。 ・How many~? を使いながら、理想のパフェに必要な果物を友達から集める。 ・タブレットを使ってパフェを完成させる。

中学生 1	New Horizon English Course 1 Unit 1	○留学生に質問をしてみよう。 ・留学生への質問を考える。 ・SKYPE を使い、準備した質問を行う。
中学生 2	New Horizon English Course 2 Unit 7	○もっとも□□な人を探してみよう ・PPT を活用し、'more', 'the most'を使う表現を復習する。 ・インタビューゲームを実施する。
中学生 3	New Horizon English Course 1 Unit 6	○友達の紹介をしよう ・PPT を活用し、教師が写真を見せながら他者紹介を行う。'S/He lives...'の表現を使う。 ・3単元の's'のルールについて考える。
中学生 4	New Horizon English Course 2 Let's Read 1	○スキットを作ろう ・前時で考えた Magic Box で叶えたい望みを使って、班でオリジナルのスキットを作る。 ・iPad を使って撮影をし、改善に向けてフィードバックを出し合う。 ・全体で発表する。

【表 4】授業後の感想（高校生）

高 a	初めて大学生と同じ空間で勉強してとても楽しかったし、将来佐賀大学で学びたいと思いました。
高 b	学校でタブレット PC は導入されているが使う機会が限られている気がするので、今回の授業で学んだことをもとに、(高校の) 先生に少しでも提案をしてきたいと思います。
高 c	実際に大学生と一緒に中学の頃の英語の授業を参考にしながら授業を組み立てていったりする作業が出来てとても良い経験になりました。
高 d	大学の講義と聞いて、堅苦しそうだなあと考えていたが、全然そんなことなかった。グループ活動では大学生の人ともコミュニケーションがとれて楽しかった。
高 e	授業計画では最初の挨拶から評価の基準まで決められていて驚いた。どうやって生徒が理解できるかを考えるのは大変だと思った。
高 f	中学校の授業では、授業案を細かく書いて授業を行っていることを初めて知った。先生たちも工夫していることを知った。
高 g	小学生に戻った感じがしてとても楽しかったです。予習や単語のテストが多い英語の授業を受けてきましたが、小学生に楽しく英語に慣れ親しませることの大切さを学べてよかったと思います。
高 h	授業 1 回をするのに思ったよりも時間がかかって大変だった。高校で授業を受ける時先生たちも同じことをやっていると思うと、1 時間 1 時間を大切に授業を受けなければならないと思った。タブレット PC や SKYPE など、ICT を使いこなすにはたくさん練習をしなくてはならないと思った。今のうちに先生の授業をじっくり見て授業の仕方を学ぼうと思います。

【表 4】の高 a - d の感想から、高校生が大学生との協同学習に楽しく取り組むことができ、大学での専門学習に対する意欲の高まりが示されている。一方で、高 e - h では、授業計画の手順や、ICT 機器の活用方法及び指導上の留意点など、より専門的な内容に言及にする感想が述べられている。次に、大学の感想の一部を【表 5】に示す。

【表 5】授業後の感想（大学生）

大A	いつもと違う授業環境で、良い刺激をもらうことができた。
大B	高校生に「授業楽しかった」「今日来て良かった」と言ってもらえて嬉しかった。指導案作りは十分には行えなかったが、単元をもっと速く選定できていたら作りやすかったかなと思った。
大C	私は ICT を用いた授業を中学校で受けたことがないので、実際に用いている高校生の意見を聞くことができてとても興味深かった。
大D	高校生に ICT 機器がどのように活用されていて、それに対して高校生がどのように感じているかを聞くことができて、ICT を取り入れた英語の授業のイメージがより鮮明に湧いてきた。しかし、実際に授業をするとなるとうまくいなくて悔しかったので、次は上手くできるように頑張りたいです。
大E	模擬授業はやはりとても難しかった。でも、実際に高校 1 年生に教えられたので、自分が中学校に実習に行くときの雰囲気が分かってよかった。うまく書かせるよりもうまく質問を促す方が大切だと思った。
大F	高校生と交流ができてとても楽しかった。高校生に外国語活動の目標の 1 つである「慣れ親しみ」について教えたり一緒に考えたり時間が持てたのが良かった。しかし、授業作成となると少し一方的になってしまった気がするので反省したい。
大G	小学校実習における自身の電子黒板の活用方法について教えることができてよかった。授業を作る際に、高校生からの意見をもっと引き出すことが出来ればよかった。

全体的に、約30分という限られた時間内で模擬授業に向けた言語活動を考案することは難しかったと述べる学生が多く見られた。その一方で、表3の大A－Cのように、高校生の視点から授業を作成し評価する活動を通して、ICT を利活用する英語授業の実践について新たな洞察が得られたり、指導者としての自己効力感が高まったりなど、有益な学習効果を示す回答も見られる。大D－Hについては、自らの指導についての批判的省察が示されている。指示の出し方や、継続性のあるやり取りを引き出す手立てなど、言語活動の展開における課題点を指摘すると同時に、次回の授業実践で改善を図るよう意気込んでいる様子が見受けられる。

4. 4. 考察とまとめ

「教師へのとびら」で開講した「英語科教育法 II」の授業では、高校生と大学生が協同で ICT を利活用した外国語活動と中学校英語科の授業を考案するという協同学習を実践した。「教師へのとびら」の意義及び独自性は、学問領域の専門性を生かした継続的な取組を地域と連携して実施することにある（第2節参照）。「専門性を生かす」という面において、今後の取組に向けた課題が主に2つ挙げられる。第一に、本時は前時の学習内容を演習形式で進めた授業であり、大学生は基礎的な知識を身に付けた状態で授業に臨んだ。しかし、時間的な制限から課題の難易度が高いと感じる大学生が多かったようである。冒頭での振り返りの時間を短縮し、活動の時間をより長く確保するべきであった。次に、電子黒板が使用できなかった点が挙げられる。当日は、電子黒板が設置されている教室の確保が叶わず、AV 機器が設置されている通常の教室で本授業を実施した。講師のパソコン1台のみが設置されている環境で実践したため、ICT 機器を活用する言語活動の「選択肢が限られる」「イメージが湧きにくい」などの問題点が生じ、学生の創造性が限られてしまった可能性が否めない。英語科教育に特化した高大連携の充実・強化に向け、これらの点を克服し授業改善に努める必要がある。

一方で、受講者全員から有意義な学習であった旨の感想が授業後に提出されており、その内容をもとに、本取組の意義と成果として以下の3つが挙げられる。

(1) 授業を「受ける」から「作る」へ視点変換

本時の演習課題に高校生は「生徒として」、大学生は「指導者として」取り組み、異なる視点を共有しながら進めていた。高校生は、「初めの挨拶から評価基準まで、先生がこんなに工夫しているとは知らなかった」、「ICT 機器の活用には練習が必要であるので、学校の先生の使い方から学んでいきたい」【表4】など、教師の視点に立って、授業作りについて考察を深めている様子がうかがえる。また、大学生との協同学習を通して ICT 機器の活用方法について学んだことにより、自らの英語学習を見直す機会が得られたようである。「1人1人にあった活用法があることを知った」「学校で使っているタブレット PC をもっと主体的に活用したい」「授業1回の授業にかかる時間を考えると、授業1時間1時間をもっと大切に受けていきたい」など、授業を「作る」側、すなわち、教師の視点を反映させた学習へと、自らの英語学習の再検討・再調整が行われている。このように複眼的に英語学習を考察することは、教師への志の高揚にもつながると考えられる。

(2) 大学での学びの可視化

「大学の授業というともっと堅苦しいイメージがあったが違った」「次々に指導案を出してくれる大学生はすごいと思った」などの回答から、大学生の姿から大学での学びに対する新たな見解を得ることができたことがわかる。更に、「将来佐賀大学で学びたいと思いました」という回答に見られるように、大学での学びの可視化から佐賀大学への進学意欲が喚起されている高校生もいた。今回、「教師へのとびら」で（学問分野に特化した）目的別の取組を実施したことで、教科観が芽生え、より具体的な進路支援の提供へとつながったのではないだろうか。

(3) メタ認知能力の育成

高校生は、大学生との授業作成、大学生の模擬授業の受講・評価を経て、「教師」と「生徒」の双方の視点から自らの英語学習の再評価を行っている。大学生においては、演習課題に設定されていた ICT を利活用した言語活動をどの程度遂行できたのか、実践した指導法がどの程度効果的であったかなどについて、模擬授業中の高校生の反応や授業後のフィードバックをもとに評価を行っている。このように複数の観点から評価を行うことにより、自らの学習を内省する能力、つまり、メタ認知能力の向上を図ることができる（吉田・松田・上村・野澤，2008）。

高校生と大学生が共に「互いに学び合う」という姿勢を持って終始活動に取り組んだことが、本講義で学びが成立した最大の要因であるといえる。「先輩」にあたる大学生は、高校生に「教える」のではなく、高校生の意見やアイデアを尊重する姿勢を貫いていた。このような学びの形態を通し高校生に教師観や教科観が醸成され、具体的な進路意欲の高揚へと結びつくのではないだろうか。英語科教育において高大連携を進めるにあたり、このような互恵的な学びの連携を積極的に実践していくことが継続的な取組の鍵を握っていると考えられる。

5. 実践Ⅱ——数学科教育

5. 1. 講義題目と概要

講義題目は「数学の教材研究と授業づくり」である。当日の受講者数は 大学生22名、高校生14名、計36名であった。

「数学科教育法Ⅲ」は、本課程の専門教育科目の一つであり、中学校教員免許状取得のための必修科目に該当する。主に大学3年生を対象とし、中学校数学の指導法に関する知識や技術を習得し、教材の開発及び授業の実践能力の育成を目標としている。本時は本科目第4回にあたる。本時の目標は、数学の授業

における教材研究で大切なことは何かと、生徒が主体的に学ぶ授業づくりを行うためにどうすればよいか受講者自身が数学的な体験を通して学習することである。

5. 2. 本時の指導計画

(1) オリエンテーション及び、グループエンカウンターを利用した自己紹介 (10分)

上述した本時の目標について簡単に説明し、グループエンカウンターを利用した班作り及び、自己紹介を行った。大学生と高校生が同じ空間で授業を受けることになる。高校生にとって大学の授業を受けることは初めての体験であり、緊張することが予想される。グループエンカウターの技法を利用し、ゲームを通して緊張を緩和すると同時に、大学生と高校生混合の4人からなるグループを9つ作り、その後簡単な自己紹介をさせ、今後の交流活動の素地づくりを図る。

(2) $64 = ?$ (30分)

ある自然数を連続する自然数の和で表すという問題に取り組む中で、どんな数学がその問題に含まれているのか。どうやって問題を解決すればよいのか。受講者自身に探究させる。その際、個人思考から集団思考という流れを作り、高校生と大学生が一緒に授業を受けているので交流を深める意味も含め、混合グループでの意見交換を積極的に行わせる。その後、この問題に関連する中学校の教科書のページをスクリーンに映し出し、内容の説明を行う。

(3) 数のレース (25分)

1～20までの自然数で1からスタートし20を取った方が勝ちという2人1組で行う簡単なゲームである。先攻後攻を決め1または2ずつ数を進めることができるというルールである。混合グループ内で対戦させる中で必勝法を見いだし、さらに一般化したらどうなるかを考えさせる。ここでも、混合グループでの意見交換を積極的に行わせる。この問題の背景には平成20年に改定された学習指導要領の中にある高校数学の整数論の内容が含まれていることを示し、数学的な説明を行った。

(4) 数学の教材研究と授業づくり (10分)

本授業で取り扱った2つの問題を例として、数学の教材研究と授業作りについてまとめ、説明を行う。

(5) 授業を振り返る。(5分)

配布した授業感想カードに本時の感想を記入させ、提出させる。

5. 3. 講義の実際と考察

5. 3. 1. 本時の意図

現在我が国の数学教育の課題の1つに、数学の得点は高いが数学は嫌いあるいは数学は役に立たないと考えている子ども達の割合が他国に比べて多いことが挙げられる。この問題を克服するために色々な取組が行われている。平成20年に改定された中学校学習指導要領第2章第3節の数学の目標では「数学的活動を通して」という言葉が文頭に謳われており、このことも現状から数学教育を変えていかねばならないという文部科学省の意図が読み取れる。ところで、「数学的活動」とは「生徒が目的意識をもって主体的に取り組む数学にかかわりのある様々な営み」(文部科学省, 2008)のことであり、例題の解説やドリル、反復練習といった教師による機械的な教え込みと技能の徹底に対する反省が込められていて、子ども達による主体的な学びや数学的な見方や考え方を重視した授業づくりが求められている。

この問題を解決するために、ドイツの数学教育学者ヴィットマンの思想を参考にする。ドイツはPISAの結果を受け、学力向上の課題に根本的に取り組んでいるのがヴィットマンである。ヴィットマンは数学

教育を幼稚園から高校まで一貫したものと考え、それに沿うカリキュラムや教科書の作成を開発している。さらに、これから算数・数学の教育にあたる教員養成課程の学生のための教育の改善にも取り組んでいる。ヴィットマンはこれからの教育に対してキューネルの言葉を援用し、次のように主張している（ヴィットマン，2001）。「教師は子ども達に知識を教え込むのではなく、子ども達自身で知識を獲得することが望まれるであろう。内容の解説や単なる教え込みではなく、知識の構成や活動を通した学習がこれからの学習には求められるだろう。」これに続けて算数・数学教師に対して、「授業の中で一方的な教え込みではなく、子ども達に数学的に探究させる方法を提供することができるのは、数学的な活動を直接体験している教師だけである。」（ヴィットマン，2001）と述べている。ここでいう数学的な体験とは、次のような問題を教師自身が行き探る経験をする事である。

「1 から n までの自然数を、和が等しくなるように2つの集合に分けなさい。 n がどのような数であれば2つの集合に分けることができますか。どのような数のときは2つの集合に分けることができませんか。」（ヴィットマン，2001）

ヴィットマンはこのような問題を数多く準備し、教員養成課程の学生に数学的に探究する経験をさせ、どのような問題であれば子ども達が主体的に学び、活動的な学習ができるのか、学生に直接体験をさせる中で身につけさせようとしている。そして、このような体験を踏まえた上で算数・数学の指導理論を教授し、理論と実践の溝を埋めようとしている。そこで本時の講義でも、直接体験を通し、実践を通した理論の学習を企画することにした。

5. 3. 2. 講義の実践及び考察

ここでは、問題「 $64 = ?$ 」の学生が行き探る様子について述べていく。まず導入で $5 = 2 + 3$ 、 $6 = 1 + 2 + 3$ 、 $7 = 3 + 4$ と紹介した後、15を連続する自然数の和で表したらどうなるか考えさせ、連続する自然数の和に表すという問題であることを理解させた。15を例にして、問題によっては答えが一通りではないことも伝えた。そこで、60はどうなるか考えさせ、63、64と順に問題を提示した。

学生は60、63までは順調に解決できたのであるが、64はなかなか解決できない。そこで、グループでの集団思考を認め、話し合いを行わせた。いくつかのグループの中から解けないのではないかと声が上がったので、解けないのであればその証明が必要であること、解けるのであればその答えを示す必要があることを伝え、再度グループでの話し合いを行わせた【写真2】。その結果解けないのではないかと声が多かったものの、なぜ解けないのか証明できているグループはなかった。10分という時間では短すぎたのかもしれない。そこで、連続する自然数の和は必ず奇数の因数をもつという文字式を使った証明を紹介し、64は素因数分解しても奇数を因数に持たないので連続する自然数の和で表せないことを示した。

この問題は普通次のような問題として扱われる。

「 2^n は連続する自然数の和で表せないことを証明しなさい。」

このまま子ども達に与えたとしても、主体的な学びが実現するとは考えにくい。なぜなら、子ども自ら発見したり、探究したりする場面がないからである。このことを学生に伝え、子ども達が主体的に学ぶ授

【写真2】 グループ活動



業づくりには、子ども達の既習の知識で探究できるような場面設定が大切であることを伝えた。その後、この問題と関連の深い中学校の内容（中学校2年生の「数と式」領域の「文字式を利用した説明」）を紹介した。教科書では「3つの連続した自然数の和は3の倍数であることを説明しなさい。」という例題での取り扱いであり、このままでは子ども達が自ら発見したり、探究したりする場面がないので、教師による一方的な教え込みの授業になる恐れがあるという話をした。ここに、教科書の例題の取り扱いの注意点がある。

次の問題である「数のレース」も「 $64 = ?$ 」と同様な流れで講義を行った。

最後に数学の教材研究と授業づくりについて本時の2つの問題を例として講義のまとめを行った。まず、教材研究では教師自身による数学体験が大切であること。自分自身で体験してこそ、その問題の中にもどのような数学が含まれているのか、問題を解決するにはどのような手順で考えればよいのか、理解することができる。次に、授業づくりでは、導入で問題に出会わせる際には「できそうだ。不思議だ。どうしてだろう。」といった情意面に訴えかけるような場面設定が大切であり、子ども達の内発的動機を喚起することが望まれる。それから個人思考の場面では、実験・観察・操作（念頭操作を含む）等を通した発見や探究と自ら発見したこと・探究したことが成り立つ理由を考えることが大切である。そして次の集団思考に移る。集団思考は強制的に話し合わせたり、学力の高い子どもが一方的に自分の考えを述べ、他はそれに従うのではなく、それぞれの子どもが個人思考で考えた事を伝えたいと思えるような集団思考が望ましい。

ここに述べた教材研究と授業づくりの基本的な考え方については、学生自身、実際2つの問題に取り組んだことで、納得しているようであった。実践を通した理論の学習が行えたといえよう。

大学生と高校生の授業後の感想を一部紹介する。

【表6】授業後の感想（大学生）

大I	高校生であっても大学生であっても「なぜ？どうして？」といった探究心を持つところは一緒だと思う。それを検証してみても合っていたとき「うれしい。やっとなってきた。」という気持ちになって学びの楽しさを実感できた。楽しい学びの場が提供できるような授業づくりをしたい。
大II	内容は中程度だったが、コミュニケーションを取りながら深く考えるような内容だったと思う。教材を教えるのではなく、いかに楽しく生きた数学を伝えていくかということを考えることができた。
大III	教材は教師が面白いと感じるものでなければ、子ども達への教育的効果がなくなるということだ。それは、自分が興味のある題材だとそれだけ面白さを他人にも共感してもらいたいという思いが働くからだ。
大IV	今日は高校生とも一緒に授業を受けて、高校生だったらこういう風に考えるんだと感じました。
大V	同じ班の高校生は教師志望のようですが、理工学部でも教師になれることを知らなかったようなので、少しアピールしました。
大VI	高校生はとても素直で、授業中とても接しやすかった。これも最初のレクリエーションあったのこともあった。

学生の感想としては、数学教師としての教材研究や授業づくりといった視点についての感想が多かった。また教師として仲間づくりや学び合いの大切さ、高校生との違いなどについて述べている学生もいた。

【表7】授業後の感想（高校生）

高i	高校の数学は、公式などを覚えて問題を解いていくだけだが、今日の授業では自分が教える側になって何が必要なのか考えることができた。
高ii	大学の講義を高一で受けることができるのはとても特別なことだと思うので今後に役立てていきたい。教師という立場に立ったとき生徒が楽しめるかということを考えていくところが教育学部だなあと

思った。

高iii 実際に問題をグループの人と解いてみて、ただ先生から公式を最初から教えてもらい解くのは全く違い、自分で考える方が頭に残りやすいと思いました。

高iv 大学生の考え方がすごいと思った。計算する前から予想して、問題を解き、自分の考えを証明しているみたいだった。一つの問題に対して色々な考えができ、ある程度予想して問題を解けるようになりたい。

高校生の感想としては、高校の数学と数学教育の違いについて述べているもの、大学生と高校生の数学の問題に対するアプローチの違いに対して述べているものが多かった。大学生に対する憧れや自分の将来像を重ねている生徒もいた。

5. 4. まとめ

本時の「教師へのとびら」で開講した「数学科教育法Ⅲ」を終えて、高校生と大学生が同時に講義を受けることの意義について以下にまとめる。

(1) 大学生と高校生がお互いにより刺激となり、意識の高揚が見られたこと

本講義において大学生の姿に憧れを抱き自分の将来像を重ねていた高校生がいたように、大学生と高校生の合同講義を行ったことで、高校生は大学生の姿に学んでいる。また、大学生も高校生の考え方を知るなどお互いにメリットがあり、将来教師をめざす大学生、高校生共に進路意識の高揚が感じられた。

(2) 数学観の変容と教える立場への見方の変化

本講義で数学的な体験を通して、小学校・中学校・高等学校で育まれてきた数学に対する教科観を見つめ直すことができたことは、高校生にとって重要であると考えられる。特に数学では、大学受験に向けた公式暗記中心の数学が数学だと思い込んでいる高校生はたくさんいる。それとは異なり、内発的動機を喚起するような数学に関する問題に出会い、自ら探究し、考えを練り合うような数学体験をしたことは、数学の教科観を変える機会となる。それと同時に、数学という教科を学ぶ立場から教える立場で考えた際、何が大切なのか。どうやって授業づくりを行っていけばよいのかについて触れることができた。このことは教師を志す高校生にとって将来の進路選択に際し、意義深いことであろう。

【表8】「小学書写」15回の流れ

回	内容
1	「読書紹介カードをつくろう」の概要説明と選書
2	硬筆を使用する書写の指導① カードの下書き
3	硬筆を使用する書写の指導② カードの清書
4	硬筆を使用する書写の指導③ 発表と評価
5	毛筆を使用する書写の指導① 用具・横画
6	毛筆を使用する書写の指導② 縦画・折れ
7	毛筆を使用する書写の指導③ はね・はらい
8	毛筆を使用する書写の指導④ 字大・配置
9	毛筆を使用する書写の指導⑤ まとめ
10	硬筆を使用する書写の指導④ かな
11	硬筆を使用する書写の指導⑤ 漢字
12	硬筆を使用する書写の指導⑥ 漢字かな交じり文
13	書写の指導過程① 書写教科書の分析
14	書写の指導過程② 書写の学習指導案
15	書写の評価、まとめ

6. 実践Ⅰ——国語科教育

6. 1. 講義題目と概要

講義題目は「硬筆を使用した書写の指導③—発表と評価—」である。当日の受講者数は、大学生32名、高校生21名、計53名であった。

「小学書写」は、本課程の専門教育科目の一つであり、小学校教員免許状取得のための必修科目である。主に大学1年生を対象とし、書写の知識と技術および国語科書写の意義と指導法を習得することを目標としている。講義15回の流れは【表8】のようになっている。本時は本科目第4回にあたる。大学生は第3回までの授業で、硬筆書写実技の一つとして、他者に紹介したい本について説明する「読書紹介カード」を完成させた。本時

の目標は、書写の観点から他者の読書紹介カードを評価することと、国語科書写指導の現状と課題を理解することの2点である。

6. 2. 本時の指導計画

(1) 本時の内容を確認し、自己紹介をする。(10分)

本時は、完成させた読書紹介カードを用いて読書座談会と読書紹介カード展覧会を行うことを伝える。また、近くの席に座った大学生と高校生とで簡単な自己紹介をさせ、高校生の緊張感を緩和し、以降の交流活動の素地づくりを図る。

(2) 読書座談会を行い、交流する。(20分)

大学生と高校生の混成グループを構成し、読書紹介カードの発表会を行う。大学生は自身の作成したカードに基づいて推薦書の紹介をする。聞き手は作品について質問や感想を述べる。

(3) 読書紹介カード展覧会を行い、評言を書く。(30分)

教室内全体を展示会場として、読書紹介カードの展覧会を行う。受講者は付箋を持ち、予め指定された作品に対して評言を書く。鑑賞時間終了後、大学生は自分の作品に寄せられた評言を読み、これまでの取組を振り返る。

(4) 書写指導の現状と課題を理解する。(15分)

配布した授業プリントに基づき、書写指導の現状と課題について、単元「読書紹介カードをつくろう」と関連づけながら整理し、本時までの活動をまとめる。

(5) 授業を振り返る。(5分)

配布した授業感想カードに本時の感想を記入させ、提出させる。

6. 3. 授業の実践と考察

6. 3. 1. 本時の意図と本時までの流れ

国語科書写の課題の一つに、的確な「書写観」の確立がある。松本(2009)が指摘するように、子どもたちには「習字」「書き方」「書写」「書道」という用語がすべて同じイメージで捉えられている実態があり、学校でも「習字」「書道」と言いながら書写の授業が行われていることがある。また、小・中学校では国語教科書と書写教科書とが別々に用意されているという実態がある。このため、教師を目指す大学生のなかには、書写は国語科から独立した一教科であると誤解していたり、国語科書写と芸術科書道を混同していたり、書写は手本の字形を目指して毛筆の練習をすることだという先入観を抱いている者も少なくない。しかし、学習指導要領に記載されているように、書写は芸術科書道とは別の目標をもった国語科教育の指導内容の一つとして位置づけられており、毛筆の指導は硬筆書写の基礎を養うものと明記されている。国語科書写は本来、手本の模倣が目標なのではなく、むしろそれを手段として自分の書写文字を見つめ直し、日常の言語生活に生きる書写技能を身につけることが目標なのである。このように、教員を目指す大学生にとって、自らの書写技能を高め書写指導の知識や技術を身につけるためには、国語科書写に対する認識(書写観)の更新が重要である。

そこで本科目の序盤では、「硬筆を使用する書写の指導」を学ぶ一環として、久米(2011)で紹介されている小学校国語科の授業モデルの一つ、「読書紹介カードをつくろう」にワークショップ形式で取り組むこととした。作文指導や読書指導と関連させながら硬筆書写技能を磨く本単元は、国語科書写の位置づけを捉え直すうえでも有益であろうと考えられる。

大学生の受講者は、本時までの授業で読書紹介カードの下書きと清書に取り組んできた。作成にあたっ

では紹介文の内容よりも書写の観点に力点を置いた。授業担当者は机間指導を行い、字間、行間、文字列の整い(行の中心または下辺を揃えること)、余白、字大、筆記具の選択といった観点を中心に助言を行った。大学生は、本時の高校生への紹介活動が予定されていることを知らされていたので、推薦本の選定から文面の仕上げまで、相手意識と目的意識を明確にして作成に取り組むことができた。その成果は、字大や配色の工夫、字形や文字列の整い、適度な余白のある紙面に表れている。

6. 3. 2. 読書座談会の実際

読書座談会では、大学生3名程度と高校生2名程度、計5名程度のグループを構成し、各グループ内で大学生から高校生らに向けて、作成した読書紹介カードの発表会を行った【写真3】。発表後には、本の内容や作品の出来映えについて大学生と高校生が感想を交流する様子が見られ、「国語科書写」の観点を意識した対話が行われた。授業後の大学生の感想を一部紹介する。

【写真3】読書座談会の様子



【表9】授業後の感想（大学生）

大い	高校生といっしょに活動できてたのしかった。人に評価されるというのは緊張した。
大ろ	高校生と一緒に授業したことによって、いつもとは違う緊張感で楽しかったです。
大は	今まで一度も会ったことがない人に読書紹介カードを見せるのは、変に緊張してしまった。でもいい体験ができた。
大に	高校生と一緒に講義を受けることでどこか新鮮な気持ちになった。国語の一部として小学書写を受けていきたいと思った。

これらの感想のように、高校生への紹介活動で生まれた普段とはちがう雰囲気や「緊張感」や「新鮮さ」ということばで振り返る大学生が計6名見られた。これらの感想には本時の読書座談会の特色がよく表れている。他者への紹介活動を組み込んだ学習は、大学生同士でももちろん可能であり意義もあろう。しかし本時においては、大学生は「今まで一度も会ったことがない人」かつ教師への志を同じくする後輩と対話することによって、形式面でも内容面においてもことばを吟味し整えようとする姿勢を持つことができた。普段から慣れ親しんでいる仲間には抱きえない、新しい関係性を築こうとする相手意識と目的意識によって、大学生は自分のことばを見つめ直すことができたのである。他者との関係の構築という、国語科教育が育てるべきことばのもっとも重要なはたらきの一つが、高校生の参画によって引き出されたといえよう。

6. 3. 3. 読書紹介カード展覧会の実際

読書紹介カード展覧会では、大学生の読書紹介カードを教室内に展示して鑑賞活動を行った。その際には、受講者全員が付箋を2枚ずつ持ち、予め割り当てた作品2枚それぞれについて評言を書くようにした。国語の先生の立場からのコメントである。指導にあたっては、まず、字大や行間、余白等、本単位における作品を評価する観点を復習した。そして、付箋には書写の観点から作品を捉え肯定的な評価のコメントを書き、書き終えた付箋は作品の脇に貼り付けるように指示をした。記入後は自由に作品を見て回る時間

とした。以下では完成作品と寄せられた評言のなかから特色ある2組を取り上げて検討したい(【写真4】【写真5】参照)。

受講者が書いた評言の内容はどうであろうか。以下はそれぞれの付箋に記された評言の引用である。

【写真4】

大ハ 実際に物語の場面に絵にあらわされていて、とても読みたくなった。字の大きさと字間がうまく意識されていて見やすかった。

高イ 一目見ただけでも何となく本の内容が感じとられていいなと思いました。字の大きさ・形も均一で個人的にうらやましい字です。ぜひ読んでみたいと思いました。

【写真5】

大ヘ 行間の取り方がとても上手いと思います。左右のスペースを使って絵を書いている所も工夫されていると思いました。


高口 字がきれいで、字の間もそろっていてとても読みやすいです。下辺もそろっていて、すごくきれいなと思いました。自分も、そのような字が書けるといいなと思います。

引用した4名の評言には、いずれも書写の観点に基づく具体性がある。「行間」「字間」「下辺がそろう」等の書写指導の用語を生かした適切な評言といえる。この4名をはじめとして、受講者の評言には、大学生・高校生の別なく、書写の観点が習得され活用された過程を認めることができる。また、とりわけ高校生の評言には、大学生の書写文字が一つの目標として意識されていることが見て取れる。「個人的にうらやましい字です」(高イ)や、「自分も、そのような字が書けるといいなと思います」(高口)といったコメントがそれである。こうした、自分の書写文字への目標意識が高まる様子は、別の高校生の授業感想にも次のように見出される。


【表10】授業後の感想(高校生)

高ハ	相手や目的を意識して文字を書くことが大切だと分かりました。日常生活でも、余白や行間を意識したいです。
高ニ	今回、来たときはとっても緊張していたけど、大学生の先輩方が優しく、安心しました。今日は「書写観点」を学び、私も普段から余白や行間を意識していこうと思いました。ありがとうございます！
高ホ	大学生が書いていた紹介文は文字もきれいで余白もちゃんとあって見やすかったです。見やすいと相手も読んでみようという気持ちになるんだなあと思いました。私も大学生みたいな字が書けるようになります。

【写真4】読書紹介カードと評言1

<p>♩ さよならドビュシー</p> <p>う 中山七里</p> <p>ピアノリストを目指す16歳 香月遙。</p> <p>祖父と従姉妹とともに火事に遭う。遙はひとりだけ生き残ったが全身大火傷。しかし、ピアノリストになる夢を指し、ピアノの猛リッスンを受ける。ところが、遙の周りで不吉な出来事が起こりはじめる。道をねらった犯行、殺人事件。犯人は誰なのか、目的は何なのか。衝撃の事実が明らかになる。</p> 	<p>実際に物語の場面が絵にあらわされていて、とても読みたくなった。</p> <p>一目見ただけでも何となく本の内容が感じとられていいなと思いました。字の大きさ・形も均一で個人的にうらやましい字です。ぜひ読んでみたいと思いました。</p> <p>高イ</p>
---	---

【写真5】読書紹介カードと評言2

<p>うどんのうーやん</p> <p>作・岡田よしか</p> <p>あらすじ</p> <p>うどんのうーやんは自分で出先先に何かの途中でいろんな食料に出会います。そして人(?)の良いうーやんはみんなをその井に受け入れ、どんどん長だくさんになっていきます。さらに旅路には大きな川や山、おもしろい敵まで出てきて…。果たしてうーやんは無事にお客さんのところまで送り届くことが出来るのか!?</p> <p>感想</p> <p>まず設定に突っ込みます。うーやんの関西弁もバカ地味です。</p> 	<p>行間の取り方がとても上手いと思います。左右のスペースを使って絵を書いている所も工夫されていると思いました。</p> <p>高ハ</p>
--	--

「普段から行間や余白を意識したい」、「大学生みたいな字が書けるようになりたい」といった目標意識を持てるのは、彼らが大学生の読書紹介カードを評価する活動を通して、日常の言語生活に書写の観点を取り入れることの良さを身をもって理解することができたからだと考えられる。本時までの活動を通して書写の観点を養ってきた大学生の取り組みの成果が、高校生の学ぼうとする意欲となって表れたといえよう。

6. 3. 4. 国語科書写に対する認識の深化・拡充

本時の終結部分では、書写指導の現状と課題について整理した。書写は独立教科ではなく国語の一部であること、またこれまでの書写指導における「手本の模倣中心」や「毛筆中心」といわれる課題を克服し、相手意識や目的意識に支えられた、国語科の言語活動の一環としての書写指導が重要であることを述べて本時のまとめとした。とくに国語科書写の位置づけに関しては受講者の関心が高く、授業感想には次のような記述が見られる。

【表11】授業後の感想（高校生・大学生）

高へ	今までの書写の授業は、毛筆ばかりをやっていたイメージがあり、正直毛筆はあまり得意ではなかったので、これからの書写教育で書写というものは習字でも書道でもないということを子どもたちにわかってほしいと思った。
高ト	私は、この授業を受けさせてもらう前までの書写のイメージは「手本通りに丁寧に書く」というようなイメージでしたが、今日の授業で書写は「読み・書き」につながることなんだと学びました。大学生の読書紹介カードすごかったです。
高チ	自分が小学生だったときは「書写」というのは「習字」というイメージしかなかったもので、この年齢になって「書写」とは何かが分かり、これから子どもたちに伝えたいという気持ちになりました。
大と	書写は国語科と別だと思い込んでいたが、国語科の一部だと聞いて、苦手意識が少しなくなった。
大ち	今までは書道に毛筆のイメージしかなくて少し苦手意識をもっていたけど、今日の授業で少し好きになりました。

高校生の感想からは、国語と書写の関係を捉え直すとともに、自分自身が的確な書写観をもって子どもたちの教育に臨まなければと考える意識の高まりを窺うことができよう。

同様の内容は大学生の授業感想にもみられるが、とりわけ上記2名の大学生の記述は、教員養成課程専門科目に高校生が参画する意義を考察するうえで示唆深い。そこから考えられるのは、国語科書写の正しい位置づけを知ることと書写への苦手意識が軽減されることとの関連性である。思うに「書写は毛筆中心の独立教科」とみなす誤った意味固着が大学生の修学意欲や修学機会への妨げとなる虞もあるのではないだろうか。それは高校生も同様であろう。小学校・中学校・高等学校で育まれてきた「書写」や「国語科」に対する偏った見方が国語科教育を学ぶことへの展望を描きにくくしているかもしれない。逆に言えば、国語科の目標や教科内容的な理解を育むことは、教育を志す高校生に対する進路保障に貢献すると考えられる。専門的内容の学習経験を通して教科観の深化・拡充を図ることは、教師を目指す高校生の進路実現を励ます重要な役割を果たすということが推察される。

6. 4. まとめ

以上、「教師へのとびら」で開講した「小学書写」の講義に関し、科目の概要、指導計画、本時の実際と考察を述べてきた。本節で明らかになった、教員養成課程専門科目に現役高校生が参画する意義は、次の3点にまとめられる。

(1) 相手意識と目的意識を伴う教育活動を創出すること

教育を志す現役高校生という適度な距離感は、大学生の相手意識・目的意識を引き出し、ことばを引き締め、責任感や使命感を伴う交流活動を創り出す。このことは、大学の国語科教育関係科目の活性化をもたらすのみならず、教育者として自分のことばを鍛える姿勢に培うはずである。

(2) 教師を志す高校生の目標意識を育成すること

高校生にとって、大学の専門教育科目に学ぶ大学生の知識や技術に触れることは、自らの目標意識を育む契機となるといえる。本講義において数名の高校生が大学生の書写文字を目指す気持ちを語ったように、大学生と高校生の合同講義において、高校生はまずもって大学生の姿に学んでいる。教師を目指す大学生との関わり合いのなかで育まれる目標意識は、高校生の進学意欲や教師への志を高めることにも寄与するはずである。

(3) 教科観の深化が高校生の進路支援となること

教師を志すうえで重要となるひとつに、それまで「学び」の立場でみてきたことを「教え」の立場に橋渡しすることがある。その際、小学校・中学校・高等学校で育まれてきた教科に対する見方や考え方（教科観）を再点検する機会をもつことは、高校生にとって重要であると考えられる。書写は国語科の一部と聞いて苦手意識が薄らいだ大学生の例のように、教科に対する認識を広げ深めることは、「教師」「教育」という進路を見極める基礎を築くことにつながる。

以上の3点の意義が見出されたのは、本講義のなかで大学生と高校生の有意義な対話的活動が営まれたからでもある。国語科教育の立場から高大連携活動を考えるとき、その基礎には、大学生と高校生のことばの連携があるということを忘れてはならないであろう。

7. おわりに

佐賀大学高大連携プロジェクト「教師へのとびら」第3回「大学生と一緒に講義を受けよう」で営まれた高校生と大学生との学びの連携は、以上に述べてきたように、英語科教育・数学科教育・国語科教育の各実践ともに成果を上げるものであった。教員養成課程専門科目に高校生が参画する意義はなにか、3科目の実践を総合していえることは次の3点である。

○ 授業を「受ける」から「作る」への視点変換

教員養成課程専門科目への参画は、高校生にとって、普段「生徒として」「受ける」側で見ていた授業を、「教師として」「作る」側から捉え直す機会となるといえる。そのことは、「教え」と「学び」の双方の立場から学習指導を考察する複眼的思考を育むとともに、教師への志を高めることにつながると考えられる。

○ 教科観の深化

大学の教科教育学関係の授業を受講することにより、受講者は、小学校・中学校・高等学校で育まれてきた教科に対する見方や考え方を省察することができると考えられる。教科に対する認識の深化・拡充は、とくに高校生にとって、自分はどの教科・校種を専門的に学びたいのか、将来何の先生になりたいのかを考える足場となるであろう。

○ 大学での学びの可視化と進学意識の高揚

大学での「教育」の学びに実際に取り組み、教育を専門的に学ぶ大学生の姿を実際に目にすることによって、高校生は進学意識を高め、「教師を目指す」という自らの進路を具体化することができる。ここに、「教育」という専門領域に特化した高大連携活動の大きな特色が認められる。

本研究は、本学の教員養成課程専門科目の一部を対象とした比較的小規模の取組ではあるが、高校生にとって「教えること（教師・教育）」へ向かう道を築くものとなり、教師を目指す大学生にとって「教科教育学の学び」を充実するものとなったということはゆるされるであろう。「教えることを学ぶ」という教育の学問の固有性を、大学生と高校生の関係性のなかに生かすこと——ここに、教員養成課程における高大連携活動の要所の一つが見出される。

注

i 都道府県別教員の ICT 活用指導力の状況（1）（全校種、小学校、中学校）

大項目 A：教材研究・指導の準備・評価などに ICT を活用する能力

大項目 B：授業中に ICT を活用して指導する能力

大項目 C：児童・生徒の ICT 活用を指導する能力

大項目 D：情報モラルなどを指導する能力

大項目 E：校務に ICT を活用する能力

参考文献

- 奏研介（2014）「タブレット PC を活用した授業実践—Hi, friends! 2『道案内』の活動における効果と課題—」『第14回小学校英語教育学会（JES）神奈川大会要綱集』小学校英語教育学会（JES），71.
- 金子淳（2002）「秋田高専におけるコンピュータを用いた英語教育（CALL）導入の際の諸問題について」『秋田工業高等専門学校紀要』第37号，91-95.
- 金子淳（2014）「英語教育における ICT の活用」『英語教育学の今—理論と実践の統合—』全国英語教育学会第40回研究大会記念特別誌，331-336.
- 久米公監修（2011）『書写スキルで国語力をアップする！新授業モデル 小学校編』明治図書.
- 佐賀県教育委員会（2014）『佐賀県が進める「先進的 ICT 利活用教育推進事業」の現状と今後の取組方針（VOL. 7）』URL: <http://www.pref.saga.lg.jp/web/var/rev0/0165/1876/201471113146.pdf>（アクセス日：2014年11月25日）.
- 佐賀県教育センター中学校英語科教育研究委員会，2008-2009.『プロジェクト研究：4 技能「聞く・話す・読む・書く」を関連付けた中学校英語科学習指導の工夫—「書くこと」の指導の充実を通して—』URL: http://www.saga-ed.jp/kenkyu/kenkyu_chousa/h21/06chuu-eigo/index_ei.html（アクセス日：2014年11月23日）.
- 田上達人（2014）「言語や文化に関する気付き」を促す ICT 活用—世界とつながる教室—『第14回小学校英語教育学会（JES）神奈川大会要綱集』小学校英語教育学会（JES），68.
- 林裕子（2014）「CALL 教材と協働学習を取り入れたインタラクティブな英語授業の実践」『グローバル人材育成教育学会誌』第1巻第1号，38-45.
- 松本仁志（2009）『「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開』三省堂.
- 文部科学省（2014）『平成25年度学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果（概要）』URL: http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1350411.htm（アクセス日：2014年11月25日）.
- 吉田晴世，松田憲，上村隆一，野澤和典（2008）『ICT を活用した外国語教育』東京電機大学出版局.
- E. Ch. Wittmann (2001) 「The Alpha and Omega of teacher education organizing mathematical activities, in Holton et al. (Eds), The Teaching and Learning of Mathematics at University Level, An ICMI Study, Kluwer Academic Publishers.
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 数学編』教育出版株式会社.

謝 辞

佐賀大学高大連携プロジェクトの共催者としてご支援・ご協力をいただいている佐賀県教育委員会の先生方に謹んで感謝を申し上げます。また、本プロジェクトの企画・運営を進めてくださっている佐賀大学アドミッションセンター長・児玉浩明先生、同副センター長・西郡大先生、高等教育開発センター・山内一祥先生、入試課長・園田泰正様と入試課の皆様は厚く御礼を申し上げます。佐賀大学文化教育学部長・甲斐今日子先生からは毎回の取組に心強い励ましをいただきました。この場を借りて御礼を申し上げます。

す。最後に、第3回プログラムに休日を厭わず参加して下さった大学生のみなさんと、「教師へのとびら」の主人公である参加者の高校生みなさんに心から感謝いたします。